

「新しい地理教育」を考える

地歴科 高橋 栄一

はじめに

本来なら、この場を借りて、来年度から本校でも導入される新指導要領に沿った新教科「地理A」「地理B」の教材の内容と構成を明らかにすべきなのだが、恥ずかしながら、まだそれができるような状態でない。その理由は以下に示す通り、大きく分けて二つある。

一つは、本校では二年生で「地理A」、三年生で「地理B」を、ともに選択履修させることになったが、その兼ね合いがなかなか明確にできない事にある。他の多くの高校を見ると、どうも「地理A」は職業高校で、「地理B」は進学校で履修させる向きのようだが、本校ではあえて、双方を履修させる方針を選んだ。その経緯は本校第42号研究紀要で触れた通りで、詳しくはそちらを参照していただきたいが、新指導要領が発表された当初、「地理A」「地理B」は全く異なる理念に基づく教科として構想されたことに起因している。しかし、実際は、その理念とは異なり、内容やその取り扱いの方法、他科目との関係、さらに大学入試科目との関係等をめぐって、両科目の具体的な区別が明確にされなかった。検定を通過した新しい教科書を見ても、期待とはかけ離れていたし、出版社によっては、「地理A」「地理B」のうち片方の教科書しか発行していないという事実は、時間的な問題を差し引いても、教科書出版会社ですら「地理A」「地理B」を峻別しあぐねている事を示す証のような気がする。このような状況にある現状で、両科目とも履修させようという方針のもとに指導計画がなかなか具体化できないのも頷けて頂けるのではないだろうか。

もう一つは、本校独自の理由である。これまでの紀要でも明らかにしてきたように、今回の教育課程の改編を間近かに、数年前から本校独自の教育改革に着手し、3年前から、文部省の研究開発の指定を受け「国際・文化科(仮称)」という新教科が試行されている。この新教科の今後の動向が、新しい「地理A」「地理B」を考える上で難しい問題を提起しているのである。

「国際・文化科」の理念や方法は別稿を参照して頂きたいが、掻い摘んでいえば、「国際社会や地球環境と切り離して我々の生活を考えられない現在、それらと積極的に関わりを持つ態度や能力を身に付けさせよう」と言うのが理念である。そして、身近生活空間から徐々に発展的に世界へ目を向けさせる題材を選択し、学習方法はディスカッションやディベート、グループ研究や論文作成などの生徒の主体的な学習方法で試行している。

この新教科との兼ね合いで何が難しいかと言えば、まず、学習の素材、つまり内容面での兼ね合いである。これまでに「国際・文化科」では、「日本の国際貢献」や「エネルギー問題」「環境問題」「文化摩擦」等を含む様々なテーマを取り上げ、前述したように、身近な問題を地球規模にまで発展させて考えさせようとしてきた。この生活・文化重視、地球環境重視などの発想は、新しい高校地理のねらい、発想と極近い。一方で「国際・文化科」はより学習方法の斬新さに重点がおかれている点が「地理」とは異なるのだから、両教科の併存の意味はあると考える事もできよう。しかし、新しい「地理A」では地域研究などにフィールドワークを取り入れ、主題的、主体的な学習方法の導入などがこれまで以上にうたわれており、もし、そのまま地理の授業として地域調査やフィールドワークなどを実施したら、生徒にとって重複感は拭えないだろう。このように授業方法の点からみても、併設の兼ね合いが難しいのである。したがって、今後どのように「国際・文化科」を扱ってゆくのか懸案中の現在、科目サイドから勝手に「地

理A」「地理B」の教材内容や構成を作成しても、学校全体の教育課程のバランスを損なう可能性も出てきてしまうのである。

以上の理由で、新教科の教材内容や構成を未だ公表するような段階にいたらないのである。現状では、本年度内一杯かけて何とか形にし、次年度以降、実際の授業を行いながら改善を続け、数年かけて納得できる科目に仕上げる事になるだろうというのが本音である。したがって、その公表はいずれ機会を改めてということにさせて頂くことにし、今回は、次年度からの「地理A」「地理B」を実施する上でも参考となるような、新しい地理教育の考え方について、現段階で考えている事を思いつくままに綴ってみたいと思う。もちろん論文などというような体裁にはならないと思うが、その点をご容赦頂きたい。

1. 高等学校における教育改革

戦後教育の大変革期である昨今、「個性重視」「自己教育力の育成」「生涯教育」「国際(異文化)理解教育」「開発教育」「グローバル教育」など様々な教育理念が提唱され、実践報告を含めてそれらを扱った研究書も枚挙にいとまがない。一種のブームのようで、まさに氾濫と言ってよいほどである。それらのいくつかを開いてみると、総じて次のような変革を求める声が大半である。つまり、教師が絶対的にリードする一斉授業、暗記中心知識偏重の授業を改め、学習の主体はあくまで児童・生徒にあり、知識は様々な経験や主体的な活動によって自ら学び取る。そういう教育観、学力観の変革とそれにとまなう教育環境の改変を求めているのである。これは、別の見方をすれば、キャッチアップ型の教育からの脱却と言えるもので、日本の置かれた国際的環境が変化した事を教育に敷衍したということであろう。時代が変わったのだから、教育も変化を求められて然るべきというわけだ。

勿論、個人的にはその時代観やそれに基づく新しい教育理念に異論はない。しかし、その具体化となると話は別である。方法論としては「主題学習」「クロスカリキュラム」「ティームティーチング」等がクローズアップされてはいる。新指導要領もそれらを強く意識したものになっているが、その通り盲目的に履行してよいものかどうか、疑問がないといたら嘘になる。特に、後期中等教育である高等学校の置かれた環境を考えると、高校ではかなり難しい問題をはらんでいるように思う。

その理由の一つは、新しい理念に基づく実践研究が多くは小中学校のものであり、高等学校の実践研究は非常に少ないことである。これは、高校教育の硬直化の表れであるともいえるが、高校段階の実践研究は、あまり他の学校の参考にならないことにも起因している。確かに小・中学校で行なわれた多くの実践例をみると、かなり普遍性を持っており、現場の努力如何ではどの学校でも導入にさほど支障はないように思える。しかし、高等学校の実践研究は部分的で特殊性の強いものが大半であり、参考にはなるが、そのまま流用できるようなものは少ない。

その違いは、義務教育であるか否かなど小・中学校と高等学校の置かれた様々な環境の相違からくるものであろう。小・中学校では、地域性を除けば、義務教育である以上、学習内容や活動内容にそれ程の学校間格差は見られない。ところが、高校は設置基準や地域社会の中の位置付けが様々で、学習内容や活動の面からみても各学校によって大きく異なる。特に、現実的な問題として進路の問題が非常に大きく関わってくる。したがって、いくら個々の学校で適した実験試行を積み重ねても、それはあくまで参考でしかなく、なかなか普遍化できない。蛇足になるが、本校で今行なわれている、「国際・文化科」の研究開発も、本校にとっては有意義な試みではあるが、実は普遍化するなどというのは、非常におこがましいということになるだろう。

結局、高校では各校でそれぞれ独自に改善の努力をしてゆくしかないのである。また、そこに実験的な試みを阻んできた要因もあるように思う。

また、授業方法と内容との関係にも問題がある。当たり前のことだが、学齢が進むとその学習能力に基づいて、学習内容はより高度になる。小学校よりも中学校、高等学校の方が、より専門性、抽象性の高い教育内容を学ぶようになって、知識は細分化され体系化される。特に高等学校の学習は中学校とは比較にならない程の質と量がある。逆に言えば、15歳～18歳という学齢の知的好奇心や精神的発達、行動力などは非常に高いレベルにまでいたっており、学習内容や方法もそれに対応するよう仕組まれていることになる。

さてそこで、この点からもう一度、これまでの新しい教育理念に基づく様々な試行実験をながめてみる。するとどうも、高校で行なう学習方法として、本当に相応しいのかどうか疑問に感じざるを得ないものも多い。例えば通常、「主題（テーマ）学習」で、度々試みられる「体験学習」など主体的な学習方法は、時間がかかる割に、直接主題に関わる内容しか体得できないわけで、知識の効率という面からすれば、非常に悪いからである。

アメリカの文化人類学者であるトーマス＝ローレンはその著書「日本の高校」の中で、某高校の事例をあげて、受験という圧力のかかった環境ではあるが、ある一定の知識量を習得することで、解釈の相対性まで理解し、使えるようになるということを描いている。逆に言えば、生徒に主体的に学習させ、その効果を実りあるものとするならば、一定量の知識を理解させておくことが前提となるということである。

たとえば、小・中学校で盛んに行なわれている農業体験実習などについて考えてみる。この体験を通じ、土と触れ、農作業の大変さや作物を育てることを実感し、食物に対する感謝の気持ちを育む等、多角的な価値観を体得する。それ以前に、小・中学校ならば、体験による単純な発見や驚きだけでも非常に意義深い学習といえるだろうし、そこから徐々に内容へ入り込む共通のレディネスやモチベーションを得ることができるといっても非常に有用であろう。ならば、高校生ではどうだろうか。

それぞれの学齢段階で見方、感じ方は異なるだろうから、小・中学校の時に体験した者でも、再び高校生で体験しても悪くはなかろう。ましてや、これまでに一度も体験したことがなければ当然体験させるべきであろう。また、地理という科目の立場からいえば、無理をしてでも体験させるべきかもしれない。しかし、本来、高校で扱うのは世界地理である。すなわち、小・中学校同様な意義での体験学習を取り入れるならば、それこそ、海外へ出て、異なる国や環境の中で体験させる事が必要になる。勿論、そんなことはできるはずもないし、たとえ海外へ行く事ができたとしても、全世界の様々な異なる環境をくまなく体験させて回ることなどは絶対に不可能である。

では、高校生は世界の農業を学習することができないのかといえば、それは違うわけで、実際に農作業をしなくても、ちゃんと学習は成立するのである。それは高校生段階ではある程度の知識があれば想像力によって容易に理解することができるからだ。（指導要領にあるように2・3の事例をあげて、重点的に学習することで本当に正しい世界観が認識されるかどうかは別であるが。）

したがって、もし、高校生段階でそのような学習方法を導入しようとした場合は、小・中学校のような体験そのものや体験から学習がスタートするような意義付けとは別の、生徒の非日常的、抽象的、総合的なレベルの思考に合致するような情報が得られるものでなければならぬ。要は、高校生には高校生に相応しい、意味ある主体的、体験的な学習を工夫しなければならないということである。高校において、新しい理念に基づいた実験試行がなされにくいのは、

すなわち、その工夫を考えるのが難しいということではないだろうか。

では、それはいったいどうしたら新しい理念を尊重した高校教育を具体的に展開することができるのだろうか。次に、地理教育に視点を絞りつつそれを考えたいと思う。

2. 高校地理における文化の扱い方

今回の改訂で示された地理学習の強調点とは、何と云っても、暗記学習からの脱却、物産地理と酷評され続けた従来の地理学習を克服し、国際化社会という時代の要請に応える教科として再編成することである。具体的には、異文化理解への配慮や学習の活性化をめざす生活文化の学習の重視であり、そのために主体的な学習と主題的な学習を重視し、内容を精選して系統的・地誌学習を重視することである。

この改訂について正直な印象は、これまで最も取り上げ方が難しい生活や文化を強調しなければならず、授業計画を立てにくくなった。しかも、これまでは系統地理を主に世界地誌を並列させる構成であったものが、今回は両者が混在した内容となった。これは、確かに総合的とも言えるが、一貫性が弱くなって、益々専門性から遠ざかってしまい、何を参照して授業を組み立てれば良いのか難しくなったなというところである。

従来、高校地理では系統地理が重視されてきた。それは、自らの生活経験に照らしながら、しかも小学校、中学校における学習の成果として、高校生は統計や統計図表・地図にそれなりの意味を見いだすことができるという前提に立っていた。かつては多くの生徒が経済統計やそれらの図表の裏にある個人や社会の生活のある程度見ることができ、それら地理的事象の裏に個人や社会・企業の意志決定を見ることができたのである。ところが、こうした生徒の生活が変容し、生徒自身が生活感覚を失いつつある昨今、学んだ知識は単なる知識でしかない。多様な文化を取り上げても、それを自分の価値観に反映させて、異文化理解まで結びつかないのである。そこに、必要以上に産業・経済学習に非難が集まり、生活・文化の学習が強調されるようになった根本的な原因がある。では、どうしたら生活や文化の学習が、自らの価値観へ反映させることができるのであろうか。

生活・文化を取り扱う地理の学習は、以下のようないくつかの方法が提唱されている。①多種多様な生活・文化の要素、例えば衣食住などを複合的にとらえ、考えさせる方法。②時間地理学(タイムジオグラフィ)の成果を生かして、様々な単位の人間の生活時間に沿いながら生活を描く方法。③時間単位と、空間単位を対応させて、統合的に生活を描写してゆく方法。例えば、集落と一日地域圏と1週間・一年、国家と一生などを対応させて、生活を描写するのである。いずれにしても、地理的事象を説明するために、特定の事例を用いながら、これまで以上に、人間や生活が窺えるような工夫がし易い学習方法である。特に③は高校段階でも有効な方法として一考に値するだろう。

しかし、ここで注意しなければならないのは、その年齢に相応しい、授業内容を工夫しなければならないということである。前節で指摘したとおり、高等学校段階では、抽象的な統計資料などから事象を考えさせる事ができる段階である。「百聞は一見に如かず」的な生徒自身の生活感覚の欠如を補うだけの生活・文化の学習は、むしろ小学校、中学校の地理学習において採用されるべきであり、高校では、さらに、自らの体験を抽象化し、客観的に社会事象を考えさせる訓練を積むことが必要になろう。そして最も重要なのは、その結果として、生徒が個々に価値を見出す事ができるような多様な価値が内在している素材を選ぶということであろう。文化・生活の学習の重点化の真の意味はそこにあるのではないだろうか。ではどうやってそれを

具体化したら良いのだろうか。次に、そこを考えてみよう。

3. 擬似体験を有効に—映画を利用した文化の学習—

世界の文化や生活を主体的に学習するのにもっとも効果的なのは、その土地へ行ってみると、その土地で生活してみることである。しかし、現実にはそれが不可能な以上、それに代わる何等かの有効な方法を考えなくてはならない。その際、教材として必要な条件は、生徒個人によって、様々な受け取り方ができる程、多様な知識が盛り込まれていること。そして、その地域の生活や文化が総合的に表現されていることが望ましい。

前述したように高校生は既に、擬似体験、二次体験を直接体験として生かせる学齢に至っていると考えられ、VTRを効果的に用いることが一つの解決方法であると思う。

西脇(1993)が、地理学習で多用される視聴覚機器のうち、特にVTRについては以下のような効用と注意点について述べているように、今後は積極的にメディアの活用を取り入れてゆくことは、主体的な学習を考える上でも重要性を増すと思われる。

VTRにはテレビや映画(ビデオ)があり、双方とも有効な教育機器である。時間や空間をこえて視聴者に代理的な経験を提供し、社会現象を動く姿として提示する。視聴者はあたかも画面の現場に存在するような状況に置かれ、心理的に直接参加するわけで、学習が意欲的かつ主体的に進められる。それだけに、興味や関心を喚起しやすいところから、学習の動機付けとしての効果も大きい。また、具体的な提示によるので、実感的であり、理解が容易にされるし、イメージも豊かになる。しかも、放送番組などを教材として利用する場合には、速報性があるうえに内容も構造化されており、教師の直接的な指導がなくても使用可能な場合すらある。

映画(ビデオ)は、映画である以上、多少の脚色は仕方ないが、感受性の強い高校生にリアリティを伴った衝撃を与えるためには、ノンフィクションの報道番組よりすぐれたメディアであると言えよう。単に世界の諸地域で起こった事を、時事的題材として扱うなら、テレビの特集番組や報道番組の方が速効性やリアリティーの面ではるかに優れている。しかし、映画は、ノンフィクションの報道では立ち入ることのできない世界や心理まで、表現することができるし、また、一般に主人公が登場し、その人間の生活や行動を中心に描かれる分、総合的に生活・文化を学習するための擬似体験としても、テレビの報道番組より優れている事が多い。

ただ、映画の場合、茫然と見てしまう危険性があるので、目的や課題を把握した上で利用した方が良いでしょう。ただし、メモをとったり感想を書かせたりすることは大切だが、得られた情報を、ことさら数値化したり、構造化したりして学習する必要は無いと思う。テーマや課題を持って観賞する、あるいは観賞したあとに個々別々の課題を持つことができればそれでよいのではないだろうか。別の見方をすれば、観た後の印象や感得したものは個人的な相違があって然るべきだし、そこにこそ、高校生段階に相応しい、モチベーションがあると考えられるのである。

アメリカの映画を例にとって考えてみる。アメリカは「合衆国」と呼ばれるように、地方分権を理想としてきた国である。映画にもそれが反映されていて、アメリカ映画は、アメリカの様々な地域を舞台にし、バラエティに富んでいる。したがって、各地を舞台にした映画を使って、そこがどんなところか、どんな生活があるのかをイメージさせることは容易だ。しかし、授業でその多様性を理解できるほどたくさんの映画を観賞する時間はないし、それでは前節で指摘したように、生活感覚の欠如を補うだけの一義的な意味しか強調できない。しかし、映画には、その映画を作った社会背景や価値観を映し出す鏡としての役割もある。もし、高校で映

画を教材として利用するなら、是非そこまで、生徒に突き付ける事が可能な映画を選ぶ必要があるだろう。そこに、総合的な生活・文化学習の真意があるように思う。では、どんな映画がそれに相当するのか、次節では、アメリカ映画を中心に具体的に紹介しておこうと思う。

4. アメリカと文化としての映画ーベトナム戦争よりー

アメリカ人にとって、ベトナム戦争は未だに癒えない大きな傷である。と同時に、これまで負けを知らなかった国民の初めての挫折であり、アメリカ合衆国が新たな社会的変容を迫られた転機となった最大の社会的事件でもあろう。

ベトナム戦争映画は70年代後半から登場した。73年にアメリカがベトナムから兵士を撤退したのを事実上の終戦とすると、最初の5年はこのテーマを真正面から取り上げるにはあまりにホット過ぎるために、むしろ絡め手からベトナム戦争の影響を見いだそうとする映画が多かった。それが異常な“ベトナム帰り”である。「ナッシュビル(75年作)」「タクシードライバー(76年作)」あたりが好例である。70年代末になって「ディア・ハンター(78年作)」や「地獄の黙示録(79年作)」などの戦場シーンをふんだんに盛り込んだ映画が作られはじめるが、戦争そのものの実態を伝える迄に至らない。80年代の強いアメリカの復権以降、徐々に右傾化していった好戦性が黙認され始めてゆく。

そんな危険な傾向を見せる中で、自らベトナムの体験者であるオリバーストーンが監督し作成した「プラトーン(87年作)」はこれまでのベトナム戦争とは一線を画している。フィクションではあるが、退役軍人の97%が、現実であると語ったというほどに、リアリティに富み、負った傷も与えた傷もすべて描きだしている。「7月4日に生まれて(90年作)」は、同監督が、下半身不随で帰国し、やがて反戦運動家としてその先頭に立つようになった実在のロン＝コヴィックの手記(76年出版)をもとに、本人の協力を得て再現して作成した映画である。「プラトーン」とは異なり、ベトナム戦争下のアメリカ社会の変質を中心に描いたものだが、これも反戦映画として秀逸である。

これではまるでオリバーストーン賛歌になってしまったようだが、アメリカが抱えている社会の問題点を、最後の聖域であるベトナム戦争をモチーフとしてあえてそれに挑んだ彼の勇氣と実力に素直に敬意を表したい。そして、何よりも彼の存在を可能成らしめるアメリカ合衆国という国の映画文化に羨望の眼差しを向けるのである。やがて、その力はベトナム戦争だけではなく、あらゆる社会の影・濃の部分へ向けられ、常に自己批判を繰り返す力となって成熟してゆく。

「ダンス ウィズ ウルブス(90年作)」では、19世紀半ばの開拓前線を舞台に、インディアンの生活が自然との共存に基盤を置いていたことや、徐々に白人入植者との軋轢を生ぜしめ、排除されるべき存在になってゆくことをインディアンの立場から描いている。かつての西部劇のように騎兵隊を襲う粗野で野蛮な現地人としてのインディアンの姿はもうそこにはない。若干モチーフは異なるが、「ラスト オブ モヒカン(92年作)」では、さらに時間を遡ってアメリカ合衆国の英・仏植民地戦争時代以前には、必ずしもインディアンは排除されるべき存在ではなく、開拓者と共存していた事を垣間見ることができる。

これらは、多人種社会アメリカ合衆国の現在置かれている環境に対して、多文化主義の真意をもう一度問い直すような姿勢が社会の中に芽生えていることを雄弁に物語っている。単なるエスニックブーム以上の何かがあると思う。

このように映画を通してアメリカ合衆国の社会を考えると、戦争の悲惨や激しさ、戦闘の

中での人間性の破壊や人権侵害などこれまで侵してきた罪の告発は言うに及ばず、人間の尊厳の問題について、個々人できちっと清算できるそういう力が社会にあるということを感じてもらいたいと思う。筆者だけが感じているのかもしれないが、残念ながら、極一部を除いて、日本にはそういう映画文化が発達していないと思う。日清日露戦争や太平洋戦争を扱った映画は数多くあるが、どれも客観的にそれを清算するような視点で描かれたものは無い。軍人であったり、民間人であったり主人公は様々ではあるが、どれも、お涙頂戴の人間ドラマに仕立てられてしまっていて、戦争そのものに対する評価が遠く押しやられてしまっている。日本も映画が産業である以上、その方が、観客動員数が多いのだから仕方が無い。が、ここで考えてもらいたいのは、何よりも、それを求める価値観が無いというのが、日本の社会を大きく特徴付けているのだということである。昨今、近隣アジア諸国との間で、太平洋戦争期の問題が取り沙汰されている。何度、日本の首脳クラスが歴訪して謝罪をしても、これといって目立った前進があるように見えないのは、日本のそんな社会性の問題に起因しているからではないのだろうか。これは余談が過ぎたようだが、このように映画一つをとっても、その国の文化や社会性の違いが見えてくるのである。

以上のように映画には単に黒板を使って教えることよりも効果的であるからだけでなく、もっと違った、まさに主体性や個性を重視できる＋アルファの何かがあるように思えるのである。一般に授業は50分単位であり、2時間あるいはそれ以上の映画を授業時間に観る事はできない。もし、観ようとするなら2時間続きの授業を意図的に組むような配慮が必要になる。しかし、必ずしも授業で観なければならないわけではない。授業と組み合わせる事が重要なのである。

*参考までに、授業で活用したい映画を以下にあげておく。どれも、事実を再現したものか、あるいは限りなく事実に近いフィクションであり、教材としては非常に有効と思われるものである。

アメリカの公民権運動を考えさせるのには、古くは19世紀の南部の黒人奴隷の実態が赤裸々に描かれてる「マンディンゴ(75年作)」。実際にあった黒人差別の事件を通して、南部のKKK団の実態を糾弾した「ミシシッピバーニング(85年作)」。最近ではキング牧師の影で、あまり目立たなかったが、その存在を再評価されているブラックモスレムの指導者を描いた「マルコムX(92作)」などがある。

さらに、アメリカ社会を描いたものではないけれど、教材として是非利用したいと考えている(実際に利用した)映画には以下のようなものがある。

ポル＝ポト(赤いクメール)が実権を握り、その後の原始共産主義と呼ばれる極端な政策が行なわれていたカンボジアを見事に再現した「キリングフィールド」(主演の一人は実際のカンボジア難民であり、彼自身その体験を出版している)

黒人開放運動が高揚した80年代の南アフリカ共和国を、亡命した白人新聞編集局長の体験記をもとに作成された「遠い夜明け(87年作)」。これは、黒人活動家に共感した白人が、南アの警察に迫害され、その黒人活動家との絆を断ち切られてゆく事を通じ、南アの人種差別の実態を描いたものである。情報が統制されていた事を考えると、実に貴重な映画である。

「ミッション(1986年作)」は、1750年～58年における南米パラグアイで行なわれたのイエズス会のミッションとスペイン、ポルトガルの植民地開拓との利害の衝突を描いたもので、現存するインディオの協力を得て当時のインディオの生活や植民地開拓者との関係ののわかりやすく描かれている。

「ガンジー(85年作)」は、ガンジーの伝記であるが、彼が活躍した時代のインドと統治国イ

ギリスとの駆け引きの中で、独立前夜の南アジアがよくイメージできる。

以上は、どれもアメリカ映画であるが、最近、発展途上国のインドや中国、トルコ、韓国などの映画も比較的容易に観賞する事ができるようになってきている。それらを見るチャンスを得れば、“貧しい”というイメージから踏みだせないこれらの途上国の人々の生活も、その文化とともに、もっと正しく認識する事ができるようになるのではないだろうか。

おわりに

新指導要領に基づく地理教育を実施しなければならない瀬戸際にもかかわらず、具体的な教材や内容、その構成などについてはほとんど触れる事無く、考えていることを思いつくまま述べさせて頂いた。

新しい教育観の中で地理教育が果たす役割は大きい。特に「国際化」時代に相応しい教科として再生が期待されていると思う。単なる外国語教育の充実が真の「国際性」育成とは無関係であることは自明である。異文化を尊重し、主体的に考え行動できる人間の育成が、「国際化」時代の教育のあるべき姿なら、まさに、それは地理教育によってもなされるべきではないだろうか。これからの地理教育は、国際性を身に付けさせる上でも要の教科として、新しく出発することが望まれているのである。

そのためにどうすべきか。十分に言い切れなかったが、これからはある程度の系統的な知識の必要性和、主体的な学習の双方が必要であると思っている。この一見矛盾するような要請に応える内容と方法を今後どのように開発してゆくかが最大の課題であり、現在、その解決の難しさを痛感している。表現を変えればどこまで教師が手を下し、どこを生徒に任せるべきかの峻別に苦慮しているということである。

映画を使うことはその一例にしか過ぎず、まだ他にも有効な方法があるに違いない。また、内容面をもっと考えてゆく必要もあろう。その意味で、これをご覧になる諸兄方々には、参考となるような事は余り無かったかもしれない。しかし、もし、貴兄が新しい教育を試みたいと意欲を燃やしておられるなら、これだけは考慮して頂きたい。教育は教師のものではない、生徒のものである。その原点に立ち帰って、今こそ、教師は勇気を持って、生徒に返すべき物は返す。そんな姿勢が必要ではないだろうか。口先だけではない個性重視の教育はそこにしか見えてこないのではないだろうか。

<参考文献>

- ・ 大津和子(1992):「国際理解教育－地球市民を育てる授業と構想－」,国土社
- ・ 大塚一雄(1994):新課程「地理A」の教科書を読み比べて,地理(1994);vol.39, No.4,古今書院
- ・ 亀井俊介 監修(1992):「世界の歴史と文化 アメリカ」新潮社
- ・ 谷岡武雄、浮田典良、正井泰夫 編(1994):「世界地誌ゼミナールIX 新訂 世界地誌の研究と教育」,大明堂
- ・ トーマス＝ローレン(米)(1988):「日本の高校 成功と代償」,サイマル出版会
- ・ 西脇保幸(1993):「地理教育序説－地球市民性の育成を目指して－」,二宮書店
- ・ 橋詰直道(1994):地理教育の危機,地理(1994);vol.39, No.8,古今書院
- ・ 毎日新聞社(1978):「昭和外国映画史」